

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 2 年 6 月 23 日現在

機関番号：37405

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2019

課題番号：15K11631

研究課題名(和文) 終末期がん患者と家族が共に実施するライフレビューが死別前後の家族にもたらす影響

研究課題名(英文) The influences of life review conducted by both end-stage cancer patients and their families on families before and after bereavement.

研究代表者

井口 悦子 (INOKUCHI, ETSUKO)

活水女子大学・看護学部・准教授

研究者番号：20363476

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、終末期がん患者と家族を対象に、研究者が面接者となり、共にライフレビュー・インタビューを実施することが、死別前後の家族にどのような影響を与えるのか、家族の語りから質的に明らかにすることを目的に実施した。4家族の協力を得て実施した結果、死別前の家族への影響には【家族としての生き方を認める】【患者から尊重された自分の生き方を認める】【患者の人生の統合に参加する】【引き継がれてきた家族の思いや生き方を継承する】【患者らしく生きられるよう家族で支える】【互いに思いや感謝を伝え合う】が明らかになった。また、死別後への影響には【故人とのつながりを自らの生き方に組み入れる】などが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は終末期がん患者と家族が共に実施するライフレビューが死別前後の家族にもたらす影響について明らかにした。死別前は、患者・家族が面接者である研究者を介して、家族史(ライフレビュー)を共に語り、冊子に創り上げていく作業の中で、患者が大事にしてきた信念や価値観を家族として共有し、互いに対する思いを伝え合う場となった。死別前の家族はカテゴリー【家族としての生き方を認める】に代表されるように家族としての人生を改めて肯定的に認識した。本介入は患者と家族の歴史を振り返ることで「つながり」を実感し、死別後は、死別前から関わりのある研究者と話すこと自体が遺族にとってグリーフケアになる可能性が示唆された。

研究成果の概要(英文)：The aim of this study was to investigate the influences of having a researcher as an interviewer and conducting a life review and interview with end-stage cancer patients and their families. It was conducted for the purpose of clarifying qualitatively. As a result of carrying out with the cooperation of 4 families, the effects on the family before bereavement are [acknowledge the way of life as a family] [acknowledge the way of life respected by the patient] [participate in the integration of the patient's life] It has become clear that [passing on the inherited family's thoughts and way of life] [supporting the family so that they can live like patients] [communication of thoughts and thanks to each other]. In addition, it was clarified that the effects after bereavement include [incorporating connections with the deceased into one's own way of life].

研究分野：がん看護

キーワード：がん 家族 ライフレビュー

1. 研究開始当初の背景

近年、高齢化社会の進行、核家族化、地縁・血縁関係における相互扶助の希薄化など遺族を支える社会資源は減少している。また、終末期がん患者の家族は大切な人を失う予期悲嘆を体験しながら、病状悪化していく患者の介護を実施しなければならないなどという多重の苦悩を抱えている。Neimeyer(2002/2006)は、悲嘆において私たちは、努力して、自分なりのやり方で意味世界を再構成し、人生・生活のナラティブに一貫性を取り戻す。ひとは自らのライフストーリーの(共同)執筆者であり、人生における重要な出来事について、意義深い説明を行おうと一生懸命になり、このような説明ができる前提が、思いがけない出来事や不条理な出来事によって疑問視されるときには、自分のライフストーリーを改訂し、編集し、あるいはさらに大幅に書き直したりする存在であることを前提にする。重大な喪失は、自分のナラティブ・コヒーレンス(物語の一貫性)の感覚だけでなく、それが重要な拠りどころとなることで確認できていたアイデンティティ感覚まで揺さぶるものである。喪失によって崩壊したライフストーリーでは、過去と未来とを明瞭に結びつけることのできる、連続性ある新たな筋書きを見つけるために、章立てをもう一度練り直し、書き直さなければならないと説明する。その上で、その苦悩を現実のものとして再確認しながら、喪失のストーリーを語り、また語り直すことができる安全なコンテクストを求めると指摘する。

終末期がん患者と家族を対象に、研究者が面接者となり、共にライフレビュー・インタビューを実施する本介入は、家族が予期悲嘆から死別後の悲嘆の中で、患者との関係性を失うという自己概念を揺らがされる状況で、家族としてのライフストーリーを共に言語化し、安全なコンテクストを提供しうると考える。

2. 研究の目的

終末期がん患者と家族を対象に、研究者が面接者となり、共にライフレビュー・インタビューを実施することが、死別前後の家族にどのような影響を与えるのか、家族の語りから質的に明らかにすることである。本介入は、死別前に、家族としてのライフレビュー・インタビューを実施し、共にドキュメントを作成する過程の中で家族がこれまで大切にしてきた価値を確認し、互いに対する思いを伝え合う機会を提供することを目的としている。本介入より、死別前の家族の力を強め、また死別後の遺族が悲嘆の過程を辿る中で、患者とのつながりを感じられることで、死別後の喪失に肯定的な意味づけを促進することが期待できると考える。

3. 研究の方法

(1) 研究協力者

ホスピス・緩和ケア病棟に入院中、もしくは在宅療養中の終末期がん患者とその家族で本研究への参加を希望する者。

(2) 介入方法

家族としてのライフレビュー・インタビューを実施し、仮ドキュメントを作成する。

家族のみのインタビューにて仮ドキュメントの修正・追加を確認し、現在の思いや感想を聞く。

2回目ライフレビュー・インタビューでは、で作成した仮ドキュメントを患者・家族に確認し、修正・追加を確認する。追加・修正がなくなった時点で完成版ドキュメントとして、希望する冊数を患者・家族に渡す。

完成版ドキュメントを渡し、家族のみのインタビューにて感想や現在の思いを聞く。

遺族インタビューは、患者逝去後、現在の生活状況や心理状態とライフレビュー・インタビューを実施したことに対する思いを聞く。

(3) 分析方法

協力者ごとにライフレビュー・インタビューで語られた内容を記述する。死別前後のインタビュー結果より、ライフレビュー・インタビューがもたらした影響を意味単位で抽出し、簡潔な言葉(コード)で表す。

死別前後への影響について、協力者ごとに抽出したコードを類似性に従い集約しカテゴリー化し、質的帰納的に分析する。

4. 研究成果

研究協力者は4家族であった。患者逝去後の遺族インタビューが実施できたのはA・C・D氏であった。以下、4家族の概要を示し、死別前後の家族への影響をコードからカテゴリー化したものを【太字】、サブカテゴリーを<>で示す。

- ・A氏(80歳代、男性)家族(ホスピス・緩和ケア病棟):長女、実弟が参加した。A氏の妻は約20年前に急逝し、その後はA氏と長女で暮らしていた。
- ・B氏(60歳代、女性)家族(在宅):同居している夫が参加した。
- ・C氏(80歳代、男性)家族(ホスピス・緩和ケア病棟):同居している妻とそれぞれ別所帯の長女、長男、次女が参加した。
- ・D氏(80歳代、男性)家族(ホスピス・緩和ケア病棟):同居している妻とそれぞれ別所帯の長女と次女が参加した。

(1) 死別前の家族への影響

死別前の家族への影響は、以下、6つのカテゴリーに集約された。【家族としての生き方を認める】は、ライフレビュー・インタビューを通して、<自分たち家族の価値を再認識する><家族で幸せであったと思いを馳せる>を含み、家族としての人生を改めて肯定的に認識した。他に、【患者から尊重された自分の生き方を認める】【患者の人生の統合に参加する】【引き継がれてきた家族の思いや生き方を継承する】【患者らしく生きられるよう家族で支える】【互いに思いや感謝を伝え合う】が抽出された。

(2) 死別後の家族への影響

死別後の家族の影響は、以下、7つのカテゴリー【ドキュメントを活用し、故人について話すきっかけとなる】【死別体験を通して自分の生き方を考える】【故人とのつながりを自らの生き方に組み入れる】【患者は幸せな生であったと振り返る】【患者のために自身の役割は果たせたという達成感】【死別後から今日までの日常を生きている実感】【ライフレビュー・インタビュー内容を悲嘆の苦しみになく振り返ることができる】に集約された。特に【ライフレビュー・インタビュー内容を悲嘆の苦しみになく振り返ることができる】は、死別後、患者との思い出を語ることは辛いことであるが、<ライフレビュー・インタビューを実施した場面が充実した時間だったと振り返る><患者が望んだ語りができ満足に思っていたことで家族も良かったと思える>というように、ライフレビューの内容が患者や自分自身に対して、肯定的にとらえられた結果が影響していた。

<考察>

(1) 死別前の家族への影響

家族は、ライフレビュー・インタビューを通して、患者が大事にしてきた価値、患者の家族に対する思い、他の家族員の支援などを再認識することとなり、これから最期まで介護する、また自身が生きていくことに力を得ていたと考える。ライフレビュー・インタビューが刺激となり、表出したい思いの増大や互いに言葉にはしなかったことが伝わった喜び、またドキュメントを共に作るという一体感が生じるといった効果が確認された。

(2) 死別後の遺族への影響

故人が大事にしてきた価値や自分へのメッセージを死別後の大きく変化した生活に合わせて、自分らしく前に向かって生きる力となるよう取り込んでいたと考える。ライフレビュー・インタビューを通して患者とその家族としての人生は一旦、終結され、今を生きるために、交わされた会話やドキュメントに残された言葉は遺族にとって、生きる道標として、その後の生に活かされる可能性が示唆された。

また、終末期にあるがん患者と家族と共に実施するライフレビュー・インタビューが死別後の遺族に対する影響はライフレビュー・インタビューの実施そのものだけでなく、ドキュメントを作成する経過での研究者とのやりとりや死別後の遺族インタビューも含めた結果であると考えられる。患者と家族と共に実施したライフレビュー・インタビューやその後のインタビューにおいて聴き手となった研究者に語ることによって、療養期間の患者や自身(遺族)に関する肯定的な語りや今、現在の日常を語ることを促し、実施者によるグリーフケアにつながることを示唆された。

<引用文献>

Neimeyer, R. A. (2002/2006). 鈴木剛子(訳), <大切なもの>を失ったあなたに - 喪失をのりこえるガイド, 春秋社

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	鈴木 志津枝 (SUZUKI SHIZUE) (00149709)	兵庫医療大学・看護学部・教授 (34533)	